
閉じ込められたお姫様

おこめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉じ込められたお姫様

【Nコード】

N0563S

【作者名】

おこめ

【あらすじ】

青空を知らないお姫様。憧れは積み重なって今にも天へと届きそう。憧れを夢では終わらせない。その願い、叶えてみせましょう。

第1話 とある国のお姫様

とある国のお姫様

城の中ではいつも一人

病弱で床に臥せっていると

国中では専らの噂

そんなお姫様の夢は簡単

「この部屋から出たい」

そう、お姫様は生まれて14年

一度もこの部屋から出たことがないので

これはそんなお姫様の人生を懸けた大脱出劇です。

暇

超暇

やることないし

城の本も読んじゃった

こんな風に空を眺めるくらいならその下を歩きたい

日差しを感じて目を細めて

青空の下を歩いては行き交う人に挨拶して

あわよくば友達ができたりして

人生を謳歌したい。

要は自由が欲しい。

だがしかし、

後ろの視線がチクチク痛い。

後ろの気配に気を配りつつ

窓から身を乗り出してのほほんとしていると、

「姫様」

来た。

「日焼けします。窓閉めますよ?」

……………ひでえ。

ただ外を見てただけなのに

なんたることでしょう

こんがり焼けても素敵じゃない

むしろ健康的でかつこいいー

などと私がブツブツ言ってる側で窓が勝手に閉められた。

私の了解得ようよ。

いつものように反論するけど通ったことは一度もない

私、姫だよな?この城の。

自分の力のなさが分かる瞬間

そう、私は姫にも関わらず

文句は却下

意見聞いてくれない

自由がない

これじゃ自分が姫かどうか怪しくなる。

いつものことって聞き分けて

いそいそとベッドに腰掛ける

枕元にある本を手にとって

一枚ページをめくる

すぐさま次のページをめくる

また次へ次へ次へ

ただ無心にページをめくる

そんな私を見た召使さんが口を開いた

「新しい本を王様にお願いしてみては？」

そうは言ってもなあ。

私はしばし悩むポーズ

お願いしたら父様はきつと買ってくれる

幼い頃はねだったものすべて与えてくれた

おもちゃもドレスも本も

ピアノもお花も絵も

でも何をもらっても私は満たされない

だって自由がないんだもん

私が一番欲しいものは自由

ただそれだけ

あとはただの暇潰しでしかない

そんなもの、もう飽きちゃった

読み飽きた本のページをめくる

次へ次へ次へと

ただ無心にページをめくる

召使さんはきつと気づいてない

私はページを逆からめくっていることに

以上が今日の私の一日でした

どうですか？

なんだか退屈そうでつまらなそうではないですか？

ずっとこれですよ

同じことの繰り返しで

ずっとこの場所で

年取って死んでいくんですよ
虚しいなんてものじゃない

こんな毎日だとふと考えてしまう
私はなんで生まれたのか

生まれた理由が分らない
誰とも関われないのならそれはいないと同じ
なら、私の存在は？
いつか私の存在理由が、わかるときが来るのかな…

第2話 新しい先生

暇。

超暇。

やることないって辛い

扉の向こうではせかせかと人の歩く音がする
窓の外では兵隊さんが巡回してる

皆、忙しいんですね

私は暇です。

そんないつも通りの墮落した生活態度の私
これはもう姫では有り得ないと自覚してます
そんな私を見ていつもの召使さんが口を開く
「お友達ほしくはないですか？」

……いきなりだな、おい。

いきなりすぎて思わず振り返ってしまったよ。
友達ですか、今友達と言いましたか
もちろん、欲しいに決まってます！

友達は私の欲しいものランキング上位です！！
驚きと喜びと疑問とその他いろいろな気持ちが頭の中で渦巻いた

「姫様に新しい先生が就くんですよ？」

柔らかな雰囲気の召使さん

語尾によかったですね、って付そう

でも、私は自分の気持ちが沈むのを感じた
思わずため息

なんだ、先生か

期待して損しちゃった

先生いらない

今更教えてもらうことなんて何もないから

私は自慢じゃないですがこの国の教育課程は全部終わってる

何せ暇だったんだ

勉強さえも暇つぶしのひとつ、

たくさんの先生を城に招いては指導を受けた
なので先生いらないです。

私の気持ちが読めたのかなんなのか、

召使さんがまた口を開く

「姫様とお年が近いとか。

きつと気が合うかと思えます。」

…そういうことか!!

先生兼、あわよくばお友達ってことね!

それはいい!!!

私の表情を読み取って召使さんが

「よかったですね」って言うてくれた

うん、よかったです!

初めてのお友達、

きつと最高の暇つぶしになることでしょう!!

そして先生兼お友達（仮）との初顔合わせの日。

約束ではお昼すぎにみえるとか。

もうドキドキで鼓動が早くって

時計の針の動きを目で追って
緊張してるのが誰の目から見ても明らかで
それでも嬉しさが込み上げてた
二時間前までは。

窓を見ると太陽が沈みかけてる
空に赤みが増えて
太陽のお勤め終了を伝える時間
待っても待っても来なくって、
夕方になってしまいました。
…うそお。

「先生、何かあったんでしょうか？」
もうこれで何回目だろう
召使さんが時計を見ながら困り果ててる
先生からの連絡は何もなかった

先生とあろう方が遅刻？
それが本当に何かあったの？
城への道中、事故か病気が行き倒れ？
まさか生命の危機とかじゃないよね？
それとも、やっぱり私が嫌だった？

不安がとても大きくなる
心の中に深く沈んでく感触
重い何かがつつかえてる感じ

やっぱり友達なんて無理だったのかな…
堕ちるときはどこまでも堕ちるってこと

これでまた関わりがひとつ減っていく

誰とも関わらないのならそれはいないと同じで

つまり私はいないってこと

そう思うと沈んでいく自分に気づいても

止める気さえ起きてこない

堕ちる気持ちの底が見えない

心だけでなく顔も下を向いた

不安から自分を守る方法

心がこんなにも重いから

身体が存在が鬱陶しい

落ち込む私にパタパタと誰かが駆け足する音が聞こえた

部屋の扉が開けられていつもの召使さんが顔を出す

少し興奮気味

召使さんの息の乱れに気がついた

「姫様、先生がみえました！」

それと同時にもう一人の人影が顔を出す

来てくれた

待っていた

待ってたら、来てくれた

不安だった

心配した

でも会いたかった、友達になりたかった

誰かと関わるって幸せ欲しかった

でも待ち焦がれていた先生は私の想像を遥かに超えていた

むしろ全く逸れたと言ってもいいかもしれない

なんと、扉から現れたその人は

「…………男？」

男性だったのです。

第3話 偽りの自己紹介

本で見たの

友達というものを

隣にただで楽しくて、弾む会話は止まらない
互いに励まし合い慰め合って

ライバルになってケンカをしても

更に二人は仲良くなれる

そうやって高め支え合うかけがえのない人

これが私の友達の知識

何も根拠がないけれど

友達って同性が多いと思ってた

だから新しい先生も女性だとばかり…

まさか、男が来るなんて。

目の前にいる先生をじつと見る

短い髪

太い首

骨ばった顔にがっしりした体つき

もう正に男だ。

……………うそお。

想像を遥かに超えている現状に頭がついてこない

これが、新しい、先生

私の友達になる人？

「あんたが姫様？」

目の前の男がそう言っ て私を指す

その言い方に敬いとか敬意とか何も感じられない
むしろ見下してる？

人を指さしちゃって

なんて無礼な人！

私は腹が立ってプイってシカトした

これが先生で友達？

冗談じゃない！

男は私を指していた指を引つ 込めて更に話し出す

「そっ っいや姫様の名前なんていうの？」

……この野郎、

態度も最低なら姫の名も知らないんか！！

「……ランといいます」

「へえ、いい名前だね」

心にもないことを。

ここで私の小さな仕返しを発動！

「偽名だけだね」

そして部屋に飾られている花をちらつ と見る

今日の花は胡蝶蘭

私の好きな花の一つ

男は今までの興味なさそうな顔を少しだけ変化させた
目を見開いて口が開いている

どうやら驚いたみたい

どうだ、参ったか！

「姫様、面白いね」

初めて誰かにそう言われた

なんだか不思議な感じがする
私には何も無いと思っていたから

「あなたの名前も教えてくれる？」

男は少し考えてる素振りを見せ、いじわるそうな顔を私に向けた

「偽名でもいい？」

…そう来たか。

相手もなんだか面白いかも

私は微笑んでうなずいた。

「ミスカ」

考えたにしてはおかしな名前。

「変な名前、何をミスしたの？」

「あんたとの出会い」

相変わらず失礼な人

私は頬を膨らませた

こんな人今まで会ったことない

こんなに失礼で無礼で、

でも話していると印象が変わる人知らない。

あまりに不思議な人だったから

あなたが教えてくれた名前も

偽りだと分かつてはいても

私には本当の名前のように思えた。

第4話 ある雨の日に

失礼な先生は自己紹介だけして帰っていった
次に来る日も告げないで
無茶苦茶だけど嫌いじゃない
それが私の第一印象。

「先生、来ませんね」
私が窓辺で頼杖ついているといつもの召使さんがそう言った
なんと、先生はあれから1週間一度も姿を現さなかった
なんて奴だ。

私は先生のこと嫌いじゃなかったけど
でも気に入ったわけでもなかった
どちらかと言うと先生のこと少しどうでもいい
あんな特殊な人と友達になるのは難しそうだったから
第一、自己紹介が偽名ってどうなんだろう
いや、先に振ったのは私なんだけど。

窓の外は雨が降っている
風が強くて横殴りの雨
雲がとても厚いみたいでお昼前なのに外は暗い
太陽の光が完全に遮断されている
こんな天気だと先生は更に来ないだろう
きっとダルいと言うんだ。
先生の心理を想像したらおかしくなって笑ってしまった。
すると突然、

「何がおかしい？」

頭上から男の声がした

びつくりして首だけ上に向ける

「外に面白いものあった？」

そこにはダルそうな先生がいた

ダルいところだけ大当たり。

ふと、先生に変な違和感を感じた

何かは分らないけど

何かがおかしい

その何かが分らないんだけど

あれ、なんだろ、この感じ

でも気付けないその違和感は

私の部屋を物色しているこの男を見ていると

自然と消えていった

なにしてんだこいつは。

「何しに来たんですか？」

私は部屋をうろついてたこの無礼極まりない男をしかりつけ、

ソファのある場所に移動して迎え合わせに座った。

目の前にはお気に入りティーセット

いつもの召使さんが淹れてくれたお茶は湯気がほわりと上がり

口に含むとほどよい甘さが広がった。

さすがいつもの召使さん

他の召使さんたちと違って甘さ加減分かってる。

「先生をしに来た」

先生もカップを口に運んだ

私好みの甘さ加減が好きではないようで少し顔をしかめた
甘いものが苦手だったみたい

「知らないかもだけど、
私には先生は必要ないんです」

まあ、勉強できるできないに関わらず、

私だったらこの人に教えてもらうのはちよつと嫌

先生はまだカップに口を付けてる

おいしいの、不味いの？

そもそも私の話聞してる？

「その本、あんたの？」

そう言つて部屋の隅にある背の高い本棚を目線で示す。

さつき先生が物色していたスペースだ

つか、仮にも姫である私をあんなつて…

「せつかく名前を教えただから、名前で呼んでください」

「でもあれ偽名だろ？」

…そうだった。忘れてた。

「で、でもあんたは嫌」

「分かった。なら姫つて呼ぶよ」

果たして、この前の自己紹介に意味はあったのか。
たぶんなさそう。

「で、その本は姫の？」

…様付けないんだ。

「そうだけど、何？」

「つまんねー本ばつか」

ム力っ！！！！

こいつ失礼すぎるだろう！

私の部屋にある本は部屋に収まりきらない数多くの本から厳選した
お気に入りなのにつ

（ちなみに2軍からは別室保管）

「姫、世界狭いんだな」

そう言つて先生はまたお茶を飲む

世界が狭い

そりやずつとここにいるんだから狭いに決まってる

私の世界は今日に映るだけの空間

ここだけなんだから

「なら、私の知らない世界を教えて」

私はある決意を込めてそう言つた

「あなたが私の先生なら、私にそれを教えてください」

先生は私の顔をじつと見る

自分が変なこと言つたのは分かつてる

でもこの人ならこんな無茶振りなんてことないだろうという確信が
あつた

「やっぱり面白いね、姫」

先生は少しだけ表情を和らげた

こんな顔もするんだ。

その先生の顔を見ていると、また不思議な感じがした。

この前も感じたこの気持ち

私の心みたいなのが一瞬明るくなった

先生の顔を見て気づいた

私は先生の言葉が嬉しいってこと

人に面白いつて思われること

それがこんなに嬉しいなんて知らなかった

先生は私を見て私に興味を示してる
自意識過剰かもだけど、先生の目は本当だった
さっきまでのつまらない顔はもういない。

「ならテストね」

「テスト？」

「姫がその気ならテストしよう」

いじわるな顔して笑う

偽物の名前を言い合ったときと同じ顔

「不合格だったら？」

「残念だね」

いじわるだ。

「じゃあ問題。」

俺がこの部屋に入ったとき、俺は何かがおかしかった。
その何かを当てて」

あ。

思い出した

確かにおかしかった

先生が部屋に来たとき小さな違和感を確かに感じた
でも気づかない

分らないその違和感が。

私がいばし悩んでいると先生はカップを置いて立ち上がった

「あつ待って！ 答え今考えてるから」

先生が帰ってしまうんじゃないかと思ひ私はとっさに引き止めた
もしかして時間切れだった？

「宿題ね」

「え？」

「次に俺が来るまでの宿題。答え見つけておいて」

先生は歩きだす

「そんなこと言っで、いつ来るか決めてないくせに！」

私のとつさの抗議に先生は足を止めた。

「明日来るよ。明日の夕方、それがタイムリミットね」

早！なぜこんなときだけ早く来るかなこの人！！

私の表情を読み取ったのか先生はまたいじわるく笑って

「じゃあな」

と言うと窓から飛び降りた。

「危ない！！！」

私は窓に駆け寄った。

私の部屋は城の中間高さに位置してる

この部屋から出たことないか分らないけどたぶん3階以上
落ちたら、死ぬ

窓の外を覗くと先生がいた

城を背にして走ってる

走るのが早いみたいで先生の姿は相当遠かった。

どうやら無事みたい

先生が元気なことに安心して私はへたり込んだ

先生は運動神経がとてもしらしい。

「姫様、濡れます。閉めますよ」

いつもの召使さんがすぐに近づいて窓を閉めてくれた

外はまだ雨が降っている

風が強く横殴りの強い雨

風向きが悪く少しの間窓を開けていただけでもう窓辺は濡れている。

「先生、風邪ひいちゃうよ」

窓を見ながら呟いた

先生、傘をささずに帰っていった

まあこの風だったら傘さしても濡れるだろうけど…

ふと、私はあることに気がついた

「…そういえば」

先生、この部屋に来たとき服も髪も濡れてなかった

こんなに横殴りの強い雨だったら傘をさしても肩や足元は濡れてしまうはず

私は気がついた。

これが宿題の答えだってこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563s/>

閉じ込められたお姫様

2011年4月19日22時25分発行